

# 中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～

伊 藤 裕 健

## はじめに

雲出島貫遺跡の発掘調査によって、雲出川下流部における中世成立期の土器相がかなり明確となった。ここでは、雲出島貫遺跡出土資料をもとに、旧国伊勢（以下、「伊勢」と呼称）の土器群の動向について考えてみたい。

第1章では、雲出島貫遺跡出土遺物の分類と土器群の変遷を追う。それを受け第2章では、当該時期を中心とした土器の生産と流通に関する様々な問題について見ていくこととする。

なお、ここでは主に11世紀から13世紀前半までの土器群を扱うことになる。雲出島貫遺跡は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、この時期はそのうちの島貫F期と便宜的に呼称している時期である。当該時期は古代から中世への移行期であり、その変化期をどこに求めるのかはそれぞれの研究者によって微妙に異なっている。ここでは、そのような問題に立ち入る前の作業としての土器群の動向を見ることを主眼とするため、表題に掲げたように中世成立期として大枠で把握することとした。

## 第1章 雲出島貫遺跡における中世成立期の土器

1998年度に実施した三重県津市雲出島貫町字町中所在、雲出島貫遺跡（第2次）調査区のうち、B5～7区からは膨大な量の土器類が出土している。その大部分が11世紀後半から13世紀前半までの時期に収まる土師器・陶器・磁器類である。口縁部、あるいは底部の1/12を1として計算した計測法（以下、口縁部計測法<sup>(1)</sup>と呼称）では、B7区だけでも土師器小皿類で2,434個体、陶器碗（山茶碗、以下、特に断らない限り「陶器碗」と呼称）で743個体となる。実際に遺跡に残っている遺物が完形品ばかりであろうはずではなく、また調査中に遺失したであろう破片の存在をも考慮すれば、調査区全体での出土土器点数は5,000個体を越えるものと考えられる。

これほど膨大な資料について限られた時間内に果たせる検討はそれほど多くないが、当面の問題を解決していくための整理や問題点の提示は行っておく必要がある。小稿は、現在指摘できるこれらのこととを不充分ながらまとめたものである。

### 1 出土土器類の分類

出土土器の時期的変遷を追うにあたっては、一括

性<sup>(2)</sup>の高い資料の存在がある意味不可欠である。幸い当遺跡からはそのような資料が多い。とくにSK215・SZ234・SK245・SK281・SK315東西・SK310・SK373などは極めて良好な一群である。だが、これらの一括資料は、当遺跡の土器群のなかでも前半期に偏っており、後半期の良好な資料が少ないというきらいがある。したがって、後半期の状況については一括資料以外のものをも援用しながら、全体として見通すこととした。

以下、雲出島貫遺跡出土土器のうち、土師器・土師質土器<sup>(3)</sup>・黒色土器について分類を行う。

#### a 土師器類

いわゆるロクロ（回転）成形を行わず、広義の手捏ね成形を行うものを土師器とする。皿・小皿・大皿・台付皿・甕および甕からの系統上にある鍋がある。この他に、製塩土器風の粗製土器もあるが、主要器種とは言えないので、今回の検討からは除外する。

##### (1)皿類

口縁部径が15cm前後のものを「皿」とし、形態と手法により、a・bの2系統に大別する。

# 土 師 器 皿

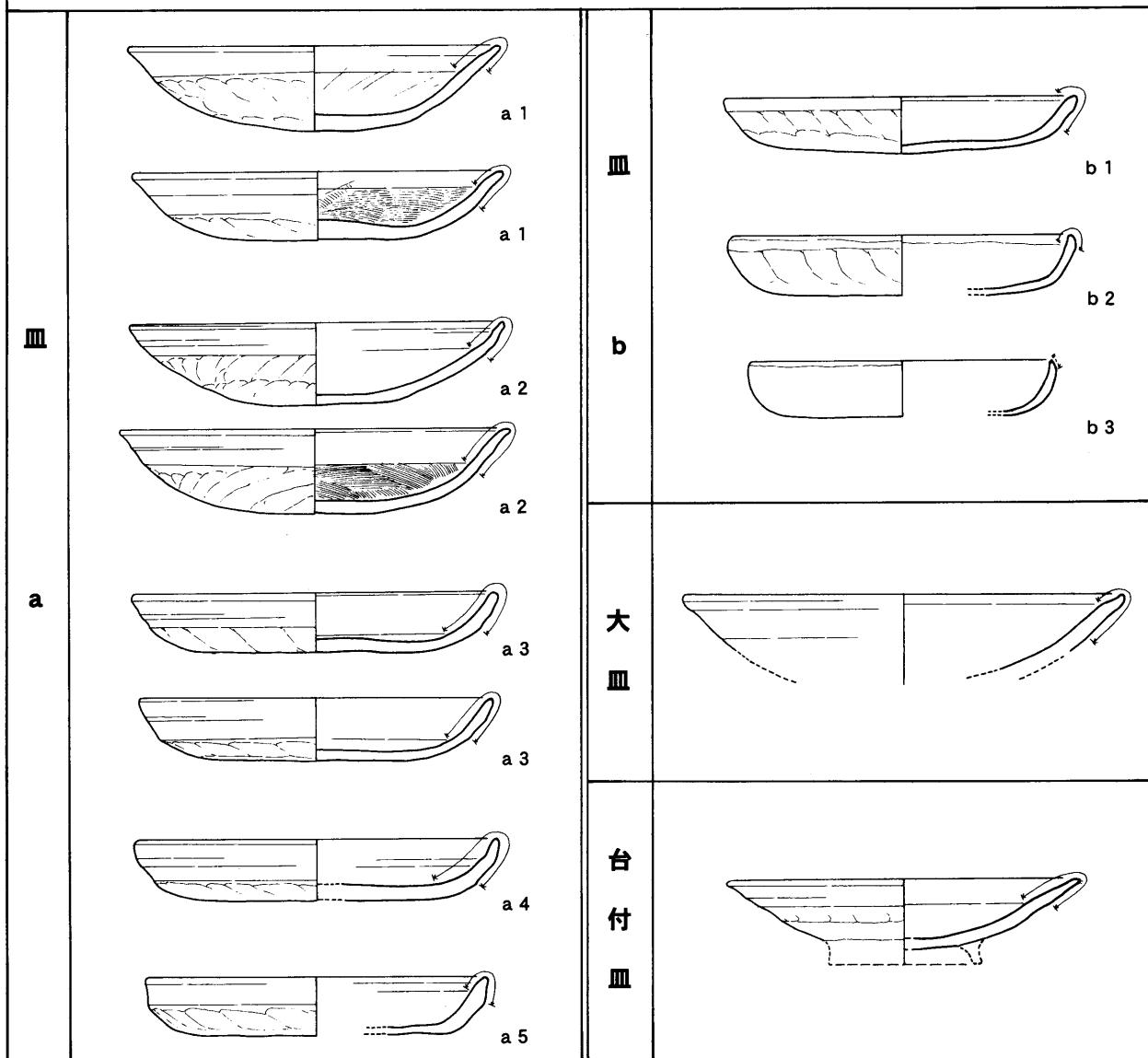


fig. 141 土師器皿類分類図 (1 : 3) 矢印はヨコナデ手法の範囲

## 皿 a

口縁部に2回ほどのヨコナデ、いわゆる「2段ナデ」を施すものの系統である。「京都系」とされているものの範疇と認識し（以下、このように判断したものに対し、単に「京都系」と表記する）、伊野近富氏が「Aタイプ」<sup>(4)</sup>とするものとの関連が強いと見るが、厳密に言えば京都のものとでは細部調整等に異同が見られる。

この系統を、次の5類に細分する。

**皿 a 1** 口縁部外面に1単位ないしは2単位のヨコナデ（以下、このような調整を「1段ナデ」のように表記する）を施すものである。底部は、やや平

たい部分を持ちながらも、全体としては断面弧状を呈する。ヨコナデを施した部分から、口縁部は外反する傾向にある。口縁部内面のヨコナデは外面よりも粗雑である。内面底部付近には、ハケメないしは板状工具によるナデが、ヨコナデ以前に施されているものが多い。

**皿 a 2** 明瞭な2段ナデを施しているものである。やや平たい底部から緩やかに広がる口縁部となる。口縁端部の上方に弱い面を持つものも見られる。内面は、ナデあるいはハケメによる調整の後、比較的丁寧なヨコナデが施されている。

**皿 a 3** 平たい底面から屈曲し、斜め上方に立ち

上がる口縁部を持つ。口縁部のヨコナデは丁寧で、2段ナデが比較的明瞭である。内面のヨコナデも丁寧で、中心近くまで施されている。皿a1・a2に見られた内面のハケメはほとんど見られない。

**皿a4** 器の全体形はほぼ皿a3と共に通するが、2段ナデのうち、口縁端部寄りのヨコナデがより強く施されている。その結果、口縁端部付近が全体的に内彎気味となる。

**皿a5** 器の全体形はほぼ皿a4と共に通するが、口縁端部付近が肉厚になるとともに、ヨコナデが2段ナデではなくなり、口縁端部寄りの1段となる。

皿a1はSK281で、皿a2はSK245・SK315東で、皿a3はSE233・SD199などで典型的に見られる。皿a4・a5は良好な一括資料が無いが、SD247やSD258などで散見できる。

このうち、皿a1・a2は手法および素地粘土ともよく類似しており、色調は橙灰色系を中心としている。皿a3・4も手法的には前者と共通するものの、色調は淡褐色系のものが中心となっている。

#### 皿b

南伊勢系およびその成立前のものである。形態から、以下のように区分する。

**皿b1** 緩やかに開く口縁部で、口縁端部付近には、幅は狭いものの明確なヨコナデが施されている。

**皿b2** 平たい底部から弧状に屈曲して上方に立ち上がる口縁部となる。口縁端部は断面三角形状となり、幅の狭い不明瞭なヨコナデが見られる。筆者が岩出IIa期としたもの<sup>(5)</sup>に相当する。

**皿b3** 形態的には皿b2と共に通するが、口縁端部のヨコナデが基本的に失われ、ナデ調整のみで仕上げられるもの。素地も白色系のものに限定される傾向がある。岩出IIb期としたものに相当する。

#### 台付皿

確認例は数点だが、明らかに高台の付くものがある。台付皿として一括りするが、系統としては南伊勢のものも含まれているようである。

#### (2)小皿類

口縁部径9cm内外のものを「小皿」とする。形態と手法の相違から、a～fの5系統に区分する。

#### 小皿a

皿aと同様、口縁部に2段ナデを施すものの系統

である。京都系で、伊野分類の「Aタイプ」に相当する形態である。次の4類に区分する。

**小皿a1** 口縁部に1段ないしは2段ナデが施される。やや平たい底部から緩く屈曲し、口縁部はやや外反する。

**小皿a2** 口縁部の2段ナデが明瞭である。断面弧状の底部からそのまま開く口縁部に至る。口縁端部は上方に面ないしは凹面を持つものが見られる。

**小皿a3** 平たい、あるいは外面中央がやや窪む底部から緩く屈曲して上方ないしは斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部はヨコナデされているが、基本的には1段ナデである。ただし、ヨコナデ範囲の下方がより強く施されるため、口縁部外面形は屈曲したような状態になっている。内面はかなり明瞭なヨコナデが均質に施されている。

**小皿a4** 平たい底部から緩く屈曲して斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。ヨコナデは1段ナデで、施され方も弱い。

#### 小皿b

断面弧状を呈する体部から口縁部が屈曲して横方向に開き、さらに端部が上方に立ち上がる。その結果、口縁端部外側が面をなす。いわゆる「て」の字状口縁皿（以下、「ての字皿」と呼称）である。京都系で、伊野分類「Bタイプ」とするものに大枠で相当するが、口縁部形態等に京都のものとの異同がある。形態と調整手法から次の4類に細分する。

**小皿b1** 底部はやや平たい。体部から口縁部にかけての屈曲は、後述する小皿b3ほど明瞭ではない。口縁部径は10～11cmほどとやや大きい。内面のヨコナデは、口縁部付近にのみ施されるものが多い。口縁部外側は面をなし、口縁端部は摘み上げ状に内側へ突出する。器壁は薄い。

**小皿b2** 内面のヨコナデが口縁部にのみ施される。ヨコナデは、内外面ともに弱く施され、とくに外面の境は不明瞭である。口縁端部は上方に突出するが、ヨコナデが弱いために摘み上げ状にはならない。内面底部は、ヨコナデ前に板状工具によるナデが見られるものもある。口縁部径は10cm内外で、器壁は2～3mm程度の厚みである。色調は淡褐色系のものが多い。

**小皿b3** 内面のヨコナデが底部付近にまで及び、

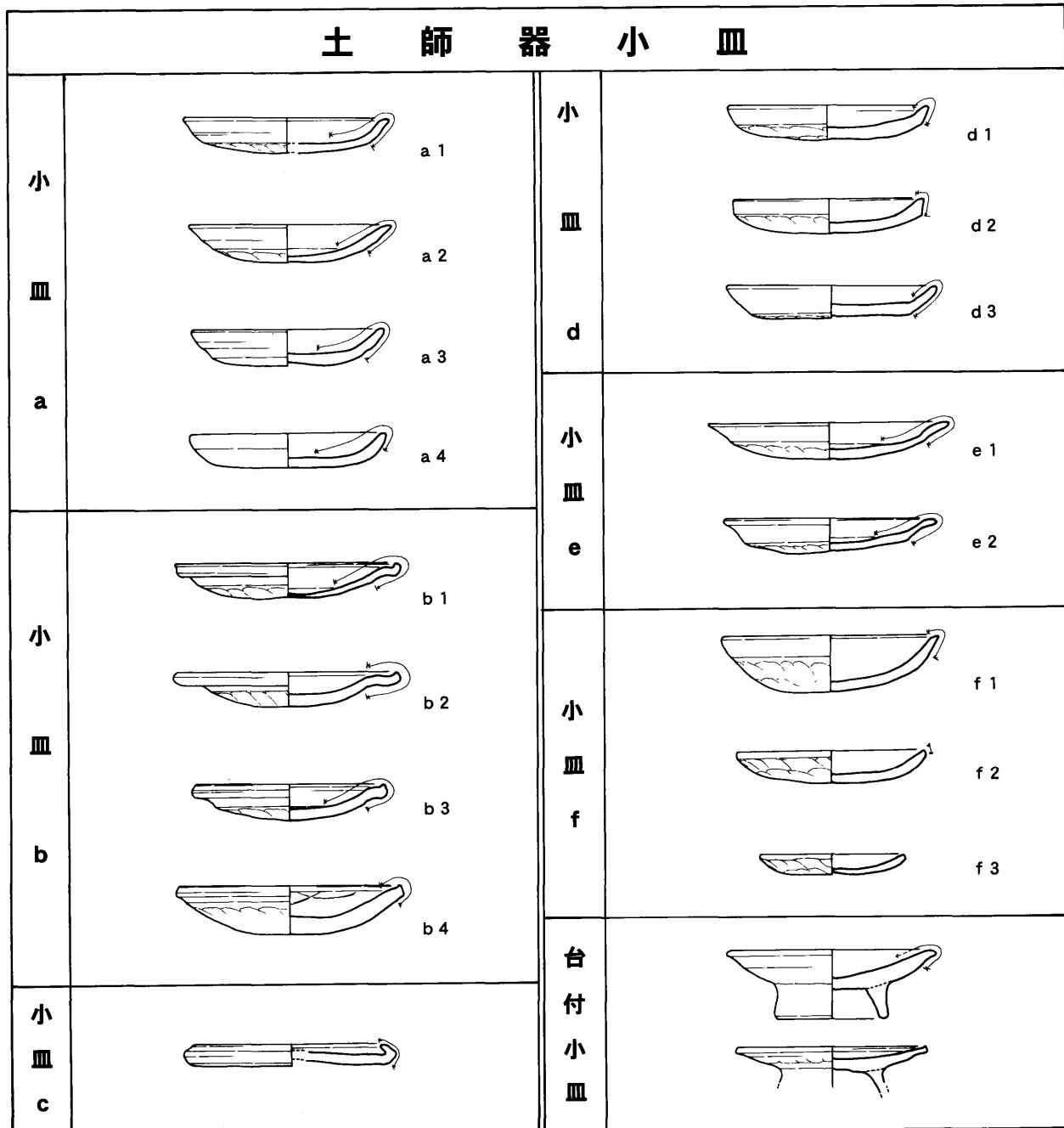


fig. 142 土師器小皿類分類図 (1 : 3) 矢印はヨコナデ手法の範囲

内面底部は径3cmほどの円を描いたように見える。外面のヨコナデも明瞭に施されており、体部からの屈曲部と口縁部との境が明確に認識できる。強いヨコナデのため、口縁端部外側は面ないしは凹面をなし、口縁端部が内側に折り返されたようなものもある。口縁部径は9cm内外で、器壁は3~4mmである。小皿b2との法量差は明確に認識できる。内面底部は、ヨコナデ前に板状工具あるいはハケメによるナデが見られるものもある。色調は橙灰色系を

呈するものが多い。

小皿b4 弧状の体部から明確な屈曲部を持たないまま口縁部に至り、口縁端部は上方に突出する。ヨコナデの方法は小皿b2と類似する。器壁はかなり厚く、全体的に粗雑な形状をなす。

#### 小皿c

平たい底部から口縁部が強く屈曲して立ち上がり、口縁端部がさらに内側に巻き込まれるような形態を呈するもの。「コースター型」と呼ばれるものである。

京都系の範疇で、伊野分類の「Cタイプ」に相当する。確認点数は少ない。

#### 小皿 d

平たい底部から強く屈曲して開く口縁部を持つもの。器壁は、その他の小皿類と比較するとやや厚手である。底部外面は粗雑なナデを施すのみである。口縁部形態とその調整手法から大きく3群に大別する。なお、小皿 d 1 と d 2 とは系統的につながるものであるが、小皿 d 3 は別系統の可能性もある。資料的な制約のため、ここでは上記の手法の特徴から便宜的にまとめておいた。

**小皿 d 1** やや丸みを持つ平たい底部から強く屈曲して短い口縁部をなすもの。形態からは、円板状のものを成形し、その外縁に強くヨコナデすることによって整形していると考えられる。

**小皿 d 2** 手法的には小皿 d 1 と共通するが、口縁部のヨコナデが強いために直立気味の口縁部となるもの。口縁端部上方に弱い面をなすものが多い。

**小皿 d 3** 平たい底部から屈曲して開く口縁部となる。口縁部は小皿 d 1 よりはやや長く、器壁も均質であることから、小皿 d 1 と同様な整形方法ではないと考えられる。

#### 小皿 e

幅広く強いヨコナデにより、外側へ大きく開く口縁部となる。そのため、器形全体としては扁平な形態をなすものである。2者に細別する。

**小皿 e 1** やや丸みを帯びる底部から大きく外反して開く口縁部を持つもの。古代における杯・皿類からの系統下にあると考えられる。

**小皿 e 2** やや平たい底部から、口縁部が強く外反して開く。外反の状況は小皿 e 1 よりは小さい。

#### 小皿 f

南伊勢系およびその前段階のものである。次の3者に細分する。

**小皿 f 1** 断面弧状を呈し、口縁部は立ち上がる。器高は3cmほどあり、やや深いといえる。口縁部にはヨコナデが施され、端部付近にはより強いヨコナデが見られる。その結果、口縁端部上方は面をなす形態となる。

**小皿 f 2** 断面弧状を呈し、口縁部には弱いヨコナデが施される。器高は1.5cm弱である。

**小皿 f 3** 断面弧状を呈するが、全体的に扁平な形態となる。口縁端部付近には極めて弱いヨコナデないしはナデが見られる。器壁は2mm程度と薄い。

#### 台付小皿

台付皿と同様、資料的には極めて少ないが、確実に存在している。口縁部は大きく開き、貼付高台が付く。この中には耳皿と呼ばれているものも含まれているものと考えられる。

#### (3) 蓋・鍋類

煮沸用土器である。筆者がかつて考察した南伊勢系土師器の成立段階<sup>(6)</sup>をもって鍋とし、それ以前を蓋とする。

#### 蓋 a

後に南伊勢系へとつながるものである。全体の特徴から次の3者に細分する。

**蓋 a 1** 口縁部あるいは頸部が緩やかに屈曲して短い口縁部を形成し、口縁端部には内側へ折り返し様の肥厚を有する。外面には縦方向のハケメがあり、まばらながら全体的に施されている。

**蓋 a 2** 口縁部の肥厚が明確な折り返しを呈するようになる。体部外面上半には、縦方向のハケメが見られるが、ハケメ間の間隔が広くなっている。体部下半の内外面には横方向のヘラケズリが見られる。

**蓋 a 3** 頸部がすぼまり、やや外反しながら開く口縁部を有する。口縁端部の折り返しによる肥厚は明瞭である。端部内面は、ヨコナデによる面が形成されているものから、次第に強く施されてそれが喪失していく傾向にある。体部外面の縦方向のハケメは基本的に喪失し、指オサエおよびナデによる調整に留められる。体部形態は、球形状のものから次第に横長楕円形をなすようになる。口縁部径は25cm内外のものが中心であるが、30cmを越えるものも次第に出現してくるようである。

#### 蓋 b

いわゆる清郷形蓋である。体部上半は長胴で、口縁部は横方向へ強く短く開くものである。伊勢湾東岸地域からの搬入品と考えられ、確認点数は少ない。

#### 鍋 a

南伊勢系のものである。口縁から頸部にかけての形態から、次の2者に細分する。

**鍋 a 1** 筆者の分類による南伊勢系鍋第1段階の

もの。頸部から口縁部までが緩やかな弧状を呈するものから、頸部が直立気味になるものへと至る。口縁端部には明瞭な折り返しが見られる。

**鍋 a 2** 筆者の分類による南伊勢系鍋第2段階のもの。器壁の薄化が進行し、体部では2~3mmほどとなる。直立気味の頸部から屈曲して口縁端部に至り、口縁端部にはヨコナデによる面が形成される。

### b 土師質土器類

回転成形で、底部に糸切り痕が明瞭に残り、焼成は土師器状を呈するのがこの土器群の最大の特徴である。「ロクロ土師器」、あるいは「回転台土師器」と呼ばれている一群に相当し、三重県下では主にロクロ土師器の呼称が用いられている。手法的には、明らかに陶器の影響下にあるが、各種の要素中には陶器・土師器双方の関連を窺わせるものがある。ここでは「土師質土器」と呼称する。詳細は後述する。

大きくまとめると、椀・小椀・皿・台付皿・小皿・台付小皿・壺および高杯?がある。

#### 椀

手法、あるいは素地粘土の状況などの特徴によって、2系統に大別できる。

**椀 a** 確認事例は1点のみである。丸椀状の体部から直立気味の口縁部に至る。後述の高杯状脚部を取り付くかたちの可能性もある。

**椀 b** 高台部分の破片が数点見られたにとどまるが、明和町斎宮跡からは全体形を知りうる良好な資料が出土している<sup>(7)</sup>。口縁部径16cm前後、器高6cm前後で、ロクロ様の回転成形で糸切りし、その後、底部外縁付近に高台を貼り付けている。焼成はやや軟質ながら、椀aとは異なり、白灰色を呈する。

椀bは、陶器椀類の手法および形態的特徴をほぼ備えているものである。伊勢のいずれかの地で生産された、いわば「初期山茶椀」と認識することも可能と考えられる。そのため、ここで採り上げる他の土師質土器とは一線を画する存在として認識するのが妥当であろうが、雲出島貫遺跡での確認例が少ないこともあり、今回の分類ではあえて分離せずにおくこととする。

#### 小椀

突出する高台から口縁部が直線的に開く形態。口

縁部径は後述の小皿と大差ないが、より深い形態をなす。確認例は1点のみであり、小皿の変形である可能性も多分にあるが、一応区分しておく。

#### 皿

無高台で口縁部径15cm前後、器高4cm前後のものである。底部には糸切り痕をそのまま残す。色調は橙灰色を呈するものが多い。全体形から、底部からやや腰を張って開き、内彎気味の口縁部を持つもの(皿a)と、底部から腰が張らずに直線的に開くもの(皿b)とに区分する。

#### 台付皿

底部糸切り成形後、貼付高台が付くもの。高台径9cm前後。全体形を知りうるものは無いが、横方向に大きく開くことから、皿bのような口縁部形をなすものと考えられる。

#### 小皿

無高台で口縁部径9cm前後のものを小皿とする。口縁部の形態を主に、次の3群に大別するが、その中でも手法的にはさらに細分が可能なものもある。

なお、ここでの区分は全体形としての区分を中心とした便宜的なもので、それぞれが系統として把握できるかどうかはさらなる検討を要する。

**小皿 a** 口縁部が外反して開くものである。そのまま開くもの(小皿a 1)と、底部から一度屈曲を持って開くもの(小皿a 2)があるが、両者に時期的な前後関係は見出しにくい。小皿a 2は類例が少なく、灰釉陶器皿の模倣である可能性もある。

**小皿 b** 口縁部が直線的に開くものである。口縁端部をそのまま丸く収めるもの(小皿b 1)と、口縁端部が丸く肥厚するもの(小皿b 2)がある。小皿b 2は、後述の小皿c 1との関連も考えられる。

**小皿 c** 口縁部が内彎して開くもの。器壁が全体的に厚く、内側器表面は平滑なもの(小皿c 1)と、口縁部が薄く、口縁端部は丸くやや肥厚する傾向を持ち、内側器表面に螺旋状の回転ナデ痕が明瞭に残るもの(小皿c 2)がある。このうち、小皿c 1は先述の小皿b 2との関連が強いと考えられる。

**小皿 d** 陶器質の非常に堅緻な焼成のもの。器高が1cm強の非常に扁平なもので、口縁部は横方向に大きく開く。口縁端部は丸く肥厚するものが多い。

#### 台付小皿

# 土 師 質 土 器

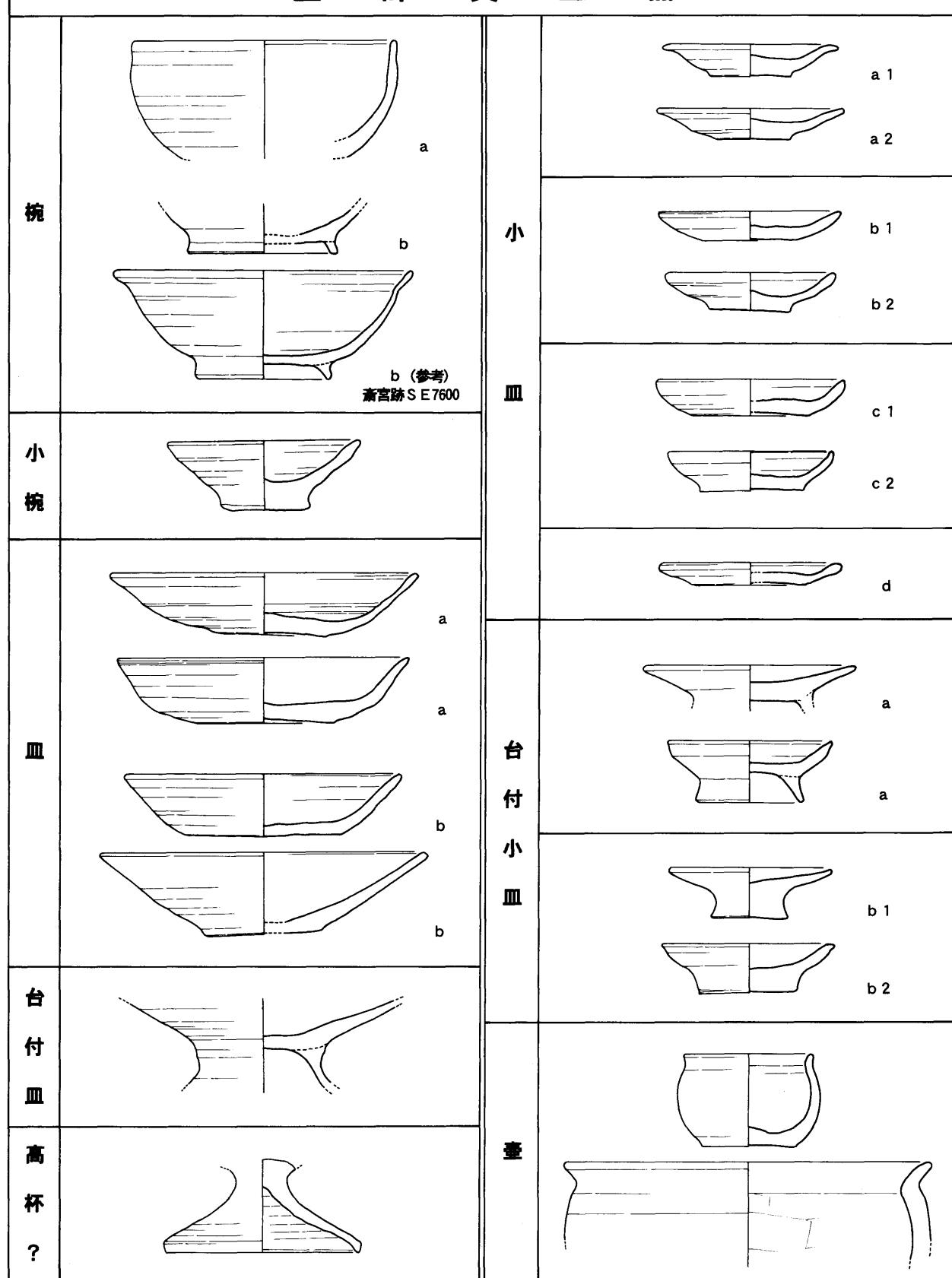


fig. 143 土師質土器類分類図 (1 : 3)

高台の形状から、2者に大別できる。

台付小皿 a 貼付高台のものである。資料的には少ないが、口縁部が直線的に開くものがある。

台付小皿 b 高台と皿部とを連続成形するもので、いわゆる柱状高台付小皿である。口縁部は大きく横開きし、口縁端部は面をなしたり、丸く収めたりするものがある。高台の状況から、高い柱状となるもの（台付小皿 b 1）と、短いもの（台付小皿 b 2）とに区分できる。いずれも資料的には少ない。

### 壺

頸部のあまり締まらないもので、口縁部径 7 cm 前後、器高 5 cm 前後の小形品の確認例が多いが、口縁部径 20 cm 弱の大きいものも 1 点ではあるが確認された。基本的に無高台であるが、低い柱状の高台が取り付くものもある。総じて資料的には少ない。

### 高杯？

1 点のみ確認した。脚部と考えて高杯としたが、天地逆の可能性も無くはない。脚部内面には螺旋状の回転ナデ痕が明瞭に残り、小皿 c 2 との共通性がある。

## c 黒色土器

基本的には土師器と共通する手法により成形されるもので、高台は貼付である。内面あるいは内外面を黒化するものである。椀および台付皿かと思われるものがあるが、ここでは椀のみを探り上げる。

### 椀

整形の相違により、2者に大別する。

椀 a 口縁部内面に沈線を持ち、内外面に精緻なミガキあるいはハケメを施すもの。口縁部は直線的に開く形態である。内面および外面口縁部付近のみが黒化される、黒色土器 A 類<sup>(8)</sup> とされるもの（椀 a 1）と、内外面全体を黒化する黒色土器 B 類とされるもの（椀 a 2）に区分する。内面見込みには格子状あるいは直線状の暗文が見られる。

椀 b 半球形の椀部で、内外面ともに比較的粗雑なハケメないしはナデで調整されるもの。口縁端部内面に沈線は見られない。内面のみを黒化したもののみが確認できた。南伊勢地域からの搬入品と考えられる。

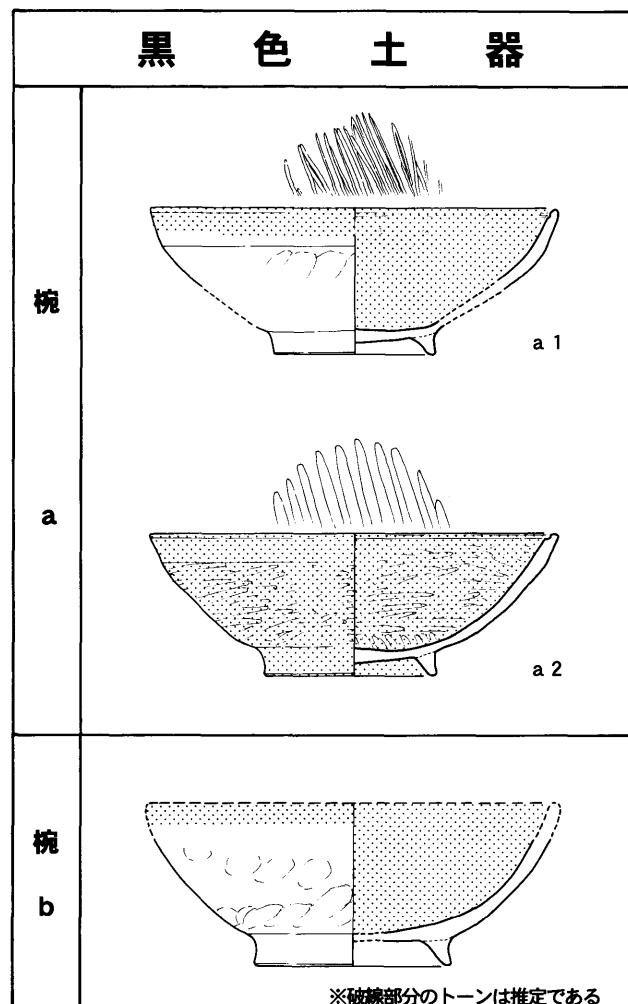


fig. 144 黒色土器分類図 (1 : 3) トーンは黒化範囲

## 2 中世島貫（島貫 F 期）の土器変遷

雲出島貫遺跡で出土した土器類について、前述の分類を基に時期区分を行う。なおここで行う土器群については、灰釉陶器を含む段階を内包しているが、冒頭で述べたように便宜的に中世（島貫 F 期）と呼称することとする。

### (1) 島貫 F 1 期

k 30pit 8 · S K194 · S K205 がこの時期の資料である。灰釉陶器の K90 号窯式<sup>(9)</sup> 以降のもので、藤澤良祐氏による山茶椀編年<sup>(10)</sup>（以下、「藤澤編年」と呼称）による 3 型式以前に相当する。

島貫 F 1 期は時間幅は広いが、資料的には極めて少ないため、一括りにする。

### (2) 島貫 F 2 期

概ね土師器小皿 b 類（ての字小皿）が主流となる

時期として認識する。なお、明確に細分こそできないものの、S Z 291の膨大な土器群は、概ねF 2期に相当する。

#### F 2期古相

土師器では皿a 1・小皿b 2が主体となる時期である。S K281の一群に代表される。陶器碗類では、藤澤編年の3型式頃に相当する。瓦器を共伴する明確な事例は無い。概ね11世紀中葉から後葉頃と考えられる。

#### F 2期新相

土師器では皿a 2・小皿b 3が主体となる時期である。S K245およびS K315東の一群に代表される。陶器碗類は藤澤編年の3・4型式、中世猿投窯における斎藤孝正氏による編年<sup>(11)</sup>（以下、「斎藤編年」）のVII-1新の段階が相当する。広義の大和型に相当する瓦器が共伴しており、川越俊一氏による編年<sup>(12)</sup>（以下、「川越編年」）のI-A~C型式である。これら各氏の編年案を参照すれば、当該時期は概ね11世紀後葉～12世紀前葉頃に相当しよう。

#### (3)島貫F 3期

土師器では皿a 3・小皿a 3が主体となる時期である。土師器小皿b類は著しく減少し、当期内で消滅すると考えられる。陶器碗では藤澤編年の4～5型式、斎藤編年のVII-2段階のものに概ね合致する。これら各氏の編年案に合わせれば、当該時期は概ね12

世紀中葉～12世紀末頃に相当しよう。

この時期の新しい段階の良好な資料はS E 233・S Z 255・S K 322・S D 199に見られる。また、1999年度の調査で確認したS K 507がこの時期の古い段階の良好な資料である（fig.145）。S K 507では大和型瓦器碗があり、山田猛氏による編年<sup>(13)</sup>（以下、「山田編年」と呼称）のII-2型式が含まれている。

#### (3)島貫F 4期

土師器では皿a 4・a 5が主体となる時期である。土師器小皿は、この時期の後半期に至ると南伊勢系がかなり優勢となっている。S D 203がこの段階の古相、S D 247・258にはこの段階の古相と新相が混じっていると考えられる。陶器碗では、古相が藤澤編年の5型式、新相が6型式に概ね相当する。南伊勢系の鍋では、第1段階から第2段階にかけてのものがある。概ね13世紀初頭から中葉と考える。

### 3 雲出島貫遺跡を中心とした各土器群の動向

先述の土器分類と段階区分を基に、伊勢における状況をもある程度踏まえながら、各土器群の状況を見る。

#### a 土師器皿類の動向

島貫F 1期に見られるのは、ての字小皿（小皿b 1）とS K 205の一群にみられるような南伊勢域のも

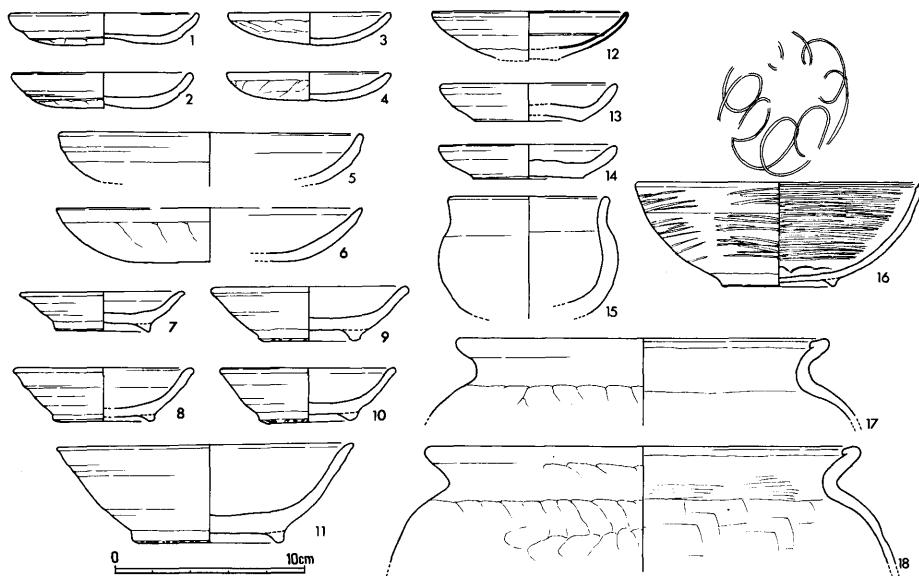


fig. 145 参考・B 2区土坑S K507（第3次調査区）出土土器（1：4）

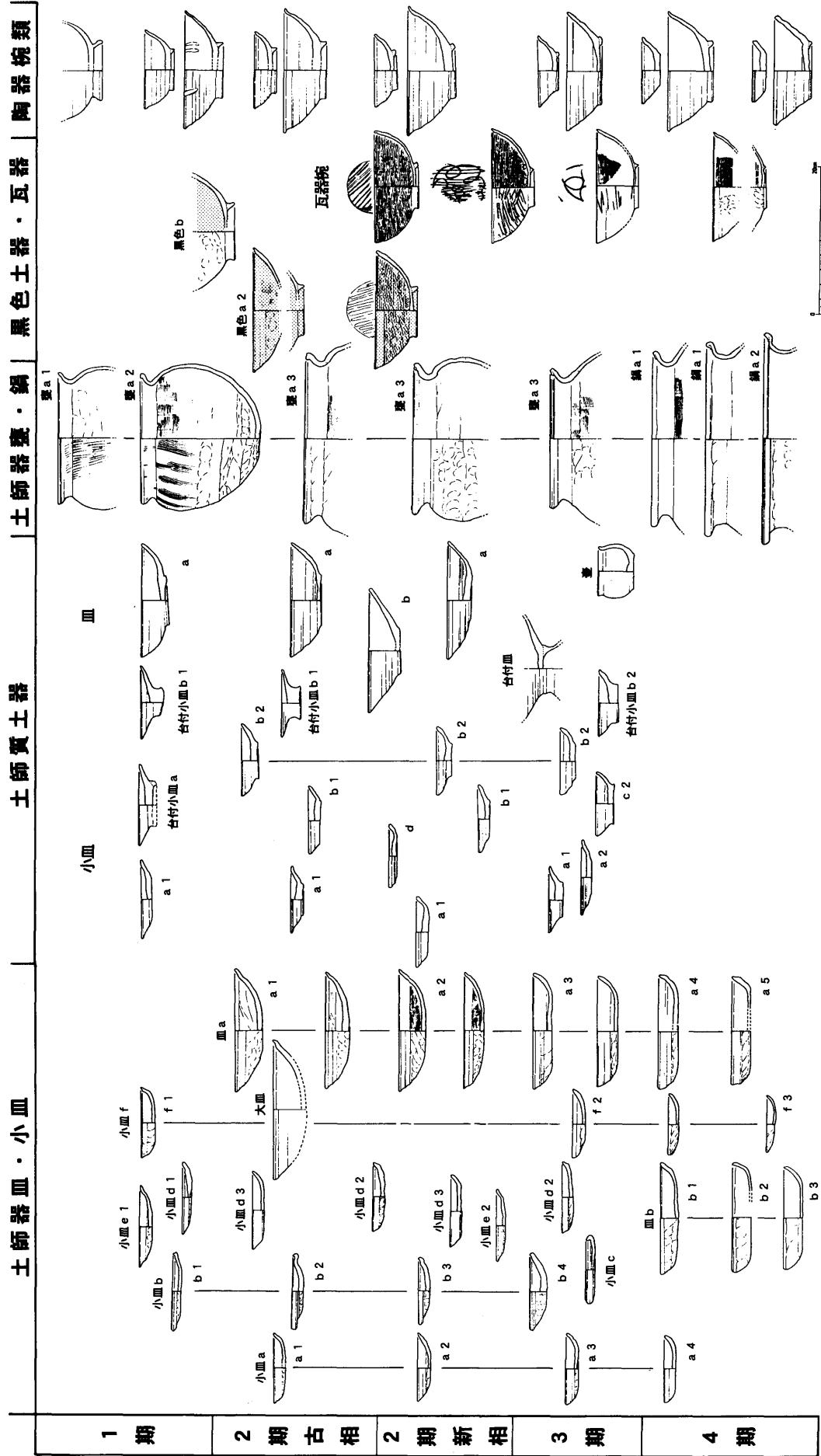


fig. 146 中世成立期の雲出島遺跡における主要土器の変遷 (1 : 8)  
 ※1. 系統の明確なものは実線(一部破線)で流れを示した。  
 ※2. 黒色土器・瓦器・陶器椀類は、参考として掲げた。

のである。この段階における小皿 b (ての字) は、伊野氏のいう模倣型のなかでも、より原型に近いものと考えられる<sup>(14)</sup>。SK205の一群は、斎宮跡の分類でいう後 I 期<sup>(15)</sup>に見られる器形に極めて類似している。このように、島貫 F 1 期の段階では京都方面と南伊勢方面の 2 地域から影響が見られる地域として認識できる。

この傾向は島貫 F 2 期においても継続するが、器形および器種構成としては全体的に京都的な色彩が色濃くなっているものの、その手法的な観点から見れば京都との違いは大きくなっており、地域色が発現しているといえる。

皿では、皿 a 1 + 小皿 a 1 + 小皿 b 2 という一群(2 期古相)が、皿 a 2 + 小皿 a 2 + 小皿 b 3 (2 期新相)と変化している。この系統性は、一定の技術関係のもとに土器群が継続して製作されたことを示している。この流れは、基本的には京都との関連を見ることができる。しかし、小皿 b の口縁部形態などには、京都そのものとは見られないような細部の異同が発生している<sup>(16)</sup>。

一方、F 1 期から一応は存続していると見られる南伊勢系統の一群(小皿 f の系統)は、量的には圧倒的に少ない。島貫 F 2 期の土師器については「京都系の時期」と呼んで差し支えないほどである。

京都系優位の状態は、続く島貫 F 3 期に至っても継続するが、土師器小皿 b 類の系統はほぼ消滅し、これに代わってこれまで数量的に劣勢であった小皿 a 類の系統が中心となっている。

島貫 F 4 期の段階では、大きくは京都系の流れの中で認識できる皿 a 4 が存在するが、続く皿 a 5 に至ると、京都系とは明確に一線を画す。資料的には恵まれないくらいがあるが、当地近隣の地域色がより明確に現出したものとして評価できそうである。

このように、雲出島貫遺跡 F 期における土師器類の動向は、ほぼ京都系によって構成されているといえる。これは、この時期の遺跡が比較的多く確認されている、斎宮跡を代表とする南伊勢地域とは対照的なあり方である。この現象は、伊勢においては京都とのつながりが最も緊密である筈の斎宮跡以上に、雲出島貫遺跡が京都寄りである、と言い換えることもできよう。

このような器形的に「京都寄り」の状況が変化し、地域色の現出する時期が島貫 F 3 期新相から F 4 期にかけての段階であろう。この段階に相当する遺跡は、近隣では宮間戸遺跡(津市雲出長常町)<sup>(17)</sup>がある。この遺跡で見られる島貫 F 3 期並行の皿 a 3 · a 4 は、雲出島貫遺跡以上に地域色が顕著である。同じような傾向は、同じく島貫 F 3 期並行の資料を出土している、雲出島貫遺跡の上流約 4 km にある平生遺跡<sup>(18)</sup>(一志郡嬉野町平生)でも見られる。

宮間戸遺跡と雲出島貫遺跡は直線距離で 1.7 km しか離れておらず中世ではおなじく「雲出」として把握されている。このように、雲出島貫遺跡で確認された京都寄りの状況とは、雲出川下流域における地域的な傾向として把握できる一方、雲出島貫遺跡においてはそれがより顕在化している、と見ることができる。

#### b 土師質土器の動向

土師質土器は、島貫 F 1 期から見られ、F 3 期を最後に終焉している。

島貫 F 1 期では、皿・小皿・台付小皿が存在しているようである。F 2 期古相までは小皿 a · b が主体で、F 2 期新相頃に小皿 c が出現している。F 3 期には、より薄手でシャープな小皿 c 2 が出現している。したがって、口縁部が内彎傾向になるのは総じて新しい要素といえそうである。

柱状高台を持つ小皿(台付小皿 b)は、F 1 期から存在し、やや形態が異なるもの F 3 期まで継続している。壺は、F 2 期新相から F 3 期にかけて見られる。

**製作手法** なお、皿と小皿とが技法的に一連のものであることを示す資料がある。fig.147に示した皿は、底部やや上方に成形途中の静止痕が見られるものである。この部分以下は形態的には小皿である。

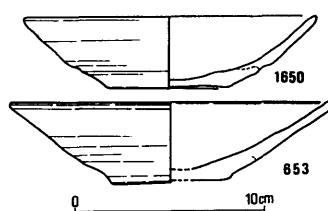


fig. 147 小皿形静止部のある皿 (1 : 4)

番号は報告書と一致する

しかし、この部分のかたちをなす完成品としての小皿は見当たらないことから、皿は小皿形のうえに足されて成形されるというものではない。当初から皿の製作を目していると考えてよい。皿はあくまでも皿として、製作工程初期から意図されていると考えられる。したがって皿の下部に見られる小皿形は、皿の製作初期に円盤状のものを素材として小皿形に成形し、その後、口縁部を付加することによって皿を形作ることを示していると考えられる。その意味では、明瞭な接合痕の無い小皿についても、同じく円盤状の素地から成形していく方法によるものと考えることができる。

**組成** 土師質土器は島貫F 3期まで、すなわち12世紀末までの時期に限定される土器群ではあるが、それが存在していた時期においては、伊勢地域全体としても土器組成上は安定して存在するものとして概ね認識されている。今回の調査資料から見ても、椀・皿類などは比較的少ないものの、小皿類はかなりの出土がある。B 6区SK322からは、土師器皿類を凌ぐほどの量が見られることも重要である。

fig.148には、B 7区出土土器を素材として、主要供膳具と小皿類の組成をグラフ化して示した。ここ

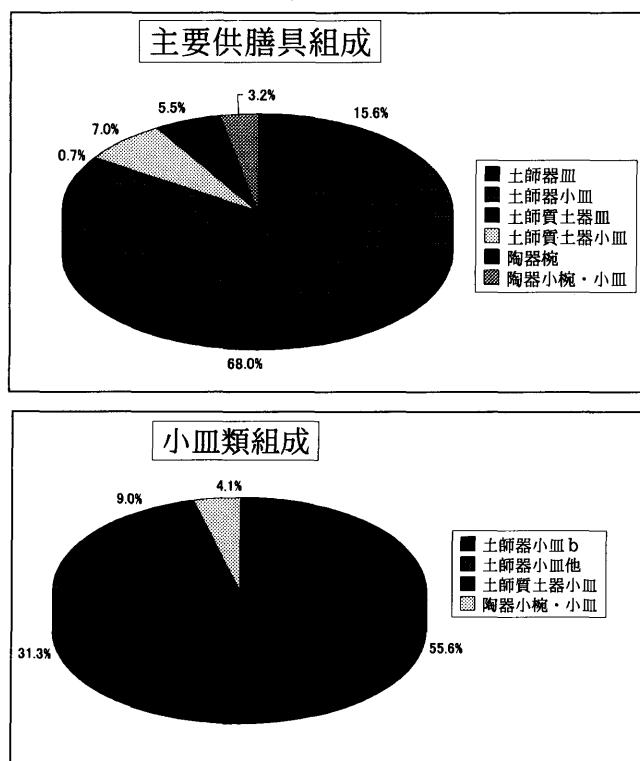


fig. 148 雲出島貫遺跡主要供膳具および小皿類組織

では、土師質土器との比較をより明確にするために、全て口縁部計測法に拠っている。主要供膳具中に占める土師質土器はおよそ7.7%、小皿類のみで見ると9.0%を示している。したがって、供膳具中のおよそ1/10が土師質土器であるといえよう。

雲出島貫遺跡とほぼ同じ時期と考えられる鴻ノ木遺跡（松阪市射和町）SD4150から出土した大量の土器のうち、土師質土器の占める割合はおよそ3%であり<sup>(19)</sup>、ほぼ同様な組成比率が斎宮跡でも見られる<sup>(20)</sup>。この2遺跡からは、南伊勢地域においては土師質土器に対する土師器が極めて優位な状況にあるということができる。この状況は基本的には雲出島貫遺跡も同じであるものの、南伊勢地域ほど劣勢ではない～南伊勢地域のおよそ3倍の量の土師質土器を消費している～という事実は、今後中伊勢地域の土器相を明確していくうえで重要な要素である。

このように、土師質土器は中世伊勢全体の評価、ひいては列島規模で展開する当該土器群の持つ意義にも深く関わっていると考えられる。三重県内では比較的等閑視されがちな土器群ではあるが、今後は各遺跡単位での組成・動向の把握が必要である。

### c 黒色土器の動向

雲出島貫遺跡における黒色土器の出土量は数少なく、詳細な検討は少々無理である。そのような状況でも、当地近隣での生産が想定されるもの（椀a類）と、南伊勢方面からの搬入ないしはその影響が考えられるもの（椀b）とがあった。

島貫F 1期の段階で、「黒色土器A類」と呼ばれている内面および外面口縁部付近のみ黒化したもの（椀a1・椀b）がある。椀aの系統はF 2期新相まで見られ、その段階には器壁全体を黒化した「黒色土器B類」と呼ばれるもの（椀a2）が確実に存在する。F 3期以降のまとまった資料中には黒色土器が見出されないため、黒色土器はF 2期までの段階で消滅したものと考えられる。

前記分類における椀a類は、黒化範囲の相違によって田中琢氏の分類に一応対比させたが、雲出島貫遺跡において確認されたこの土器群は粗雑な調整（ハケメ・ヘラミガキ）と暗文を持つものであり、畿内方面からの搬入というよりは遺跡近隣、少なくとも

伊勢地内において生産されたものと考えるのが妥当であろう。そして椀b2は、F2期新相の段階で瓦器との共伴が一括資料によって確認できる。

さて、南伊勢地域の黒色土器については、斎宮跡を中心とした大川勝宏氏の分析がある。大川氏によると、斎宮跡での黒色土器と瓦器とでは「若干の時間差」があり、瓦器は「黒色土器とオーバーラップすることなく」出現するという<sup>(21)</sup>。雲出島貫遺跡（中伊勢）と斎宮跡（南伊勢）との地域的な差、あるいは遺跡の性格にもよってこのような現象が生じるのかも知れない。少なくとも雲出島貫遺跡では、陶器椀は藤澤編年の3型式頃、瓦器椀では川越編年のI段階A～C型式に伴う黒色土器が存在することは明白である。

前記分類における椀b類は、大川氏のいう椀Cに相当する。大川氏が指摘しているとおり、この椀Cは極めて地域色の色濃い一群であり、おそらく斎宮跡近隣で生産されたものであろう。これと前記分類の椀a2とは、手法的あるいは形態的にも大きく異なっているものの、いずれもそれぞれの地域における、いわば伝統的精製品としての黒色土器を脱したものとして評価できるかと考える。

#### d 瓦器の動向

伊勢での生産は考えられず、地域外からの搬入品・流通品として把握する。雲出島貫遺跡においては、土器組成上は少ないが、絶対量としてはそこそこの出土がある。

瓦器椀の出現はF2期新相の段階からである。概ね伊賀を含んだ大和型の範疇で把握でき、それ以外の系統のものは見られない。SK245からは川越編年のI-A・B型式のものが見られる。また、SK315東から出土した瓦器椀は川越編年のI-C型式に相当する。

島貫F3期の例として、SD292で川越編年のII-A型式、山田編年のII-2型式のものが存在する。SE233では山田編年のII-3型式が見られる。

F4期に相当する瓦器はさらに少ないが、SD258からは小片ながら山田編年のIII-1型式に相当するものが見られる。

黒色土器・瓦器ともに出土量は少なく、後述する

陶器椀類と比べれば歴然とした差がある。しかし、少量ながら常に存在しているという現象には注意すべきである。

#### e 陶器類の動向

椀皿類を中心に、壺・甕・練鉢などが見られる。伊勢での生産は原則的に無く、尾張・三河方面からの搬入・流通品で、主要供膳具中では土師質土器を凌ぐ組成（8.7%）を示す（fig.148）。

島貫F1期では椀・皿類が見られ、概ね猿投・瀬戸産で占められており、少量の渥美産のものが伴う。F2期では椀・小椀のほか、猿投産と考えられる壺も見られる。椀類では概ね猿投・知多産と渥美産が主体で、少量の瀬戸産を含むようである。F3期では椀・小椀類のほか、壺・甕類が増加する。椀類ではやはり猿投・知多産および渥美産が中心である。甕類は渥美産がやや目立つ。F4期では、椀・皿類、練鉢などが見られる。

#### f 貿易陶磁器類の動向

構造に伴うものは比較的小ないが、当遺跡は伊勢のなかでもかなりまとまった出土の見られるところである。白磁は森本朝子氏による博多分類<sup>(22)</sup>（以下、「博多分類」と呼称）を基準とし、部分的に山本信夫氏のまとめられた太宰府分類<sup>(23)</sup>（以下、「太宰府分類」と呼称）も併用しながら全体的な傾向を見る。青磁は太宰府分類を用いた。

白磁 fig.149に当遺跡出土の主要な白磁をまとめた。椀では、博多分類0・II・IV・V・VI・IX類のものがある。なかには、筆者の目からはこれまでの分類に当てはめることのできないものもある。とくに、外面に縦線文を施したものは伊勢では初見であり、なおかつそれが複数点出土したことは特筆できるのではなかろうか。

この一方で、壺類の確認例は数少ない。椀皿類の多様性とは対照的である。

F1期の状況は不明。F2期に至ると多種のものが確認できる。森本氏のいう広東系椀類（博多分類0・III類、II類に相当）はこの時期に集中する。

F3期の新しい段階では、博多分類IV類（太宰府分類IV類）の断面三角形の大きな玉縁を持つ椀が出

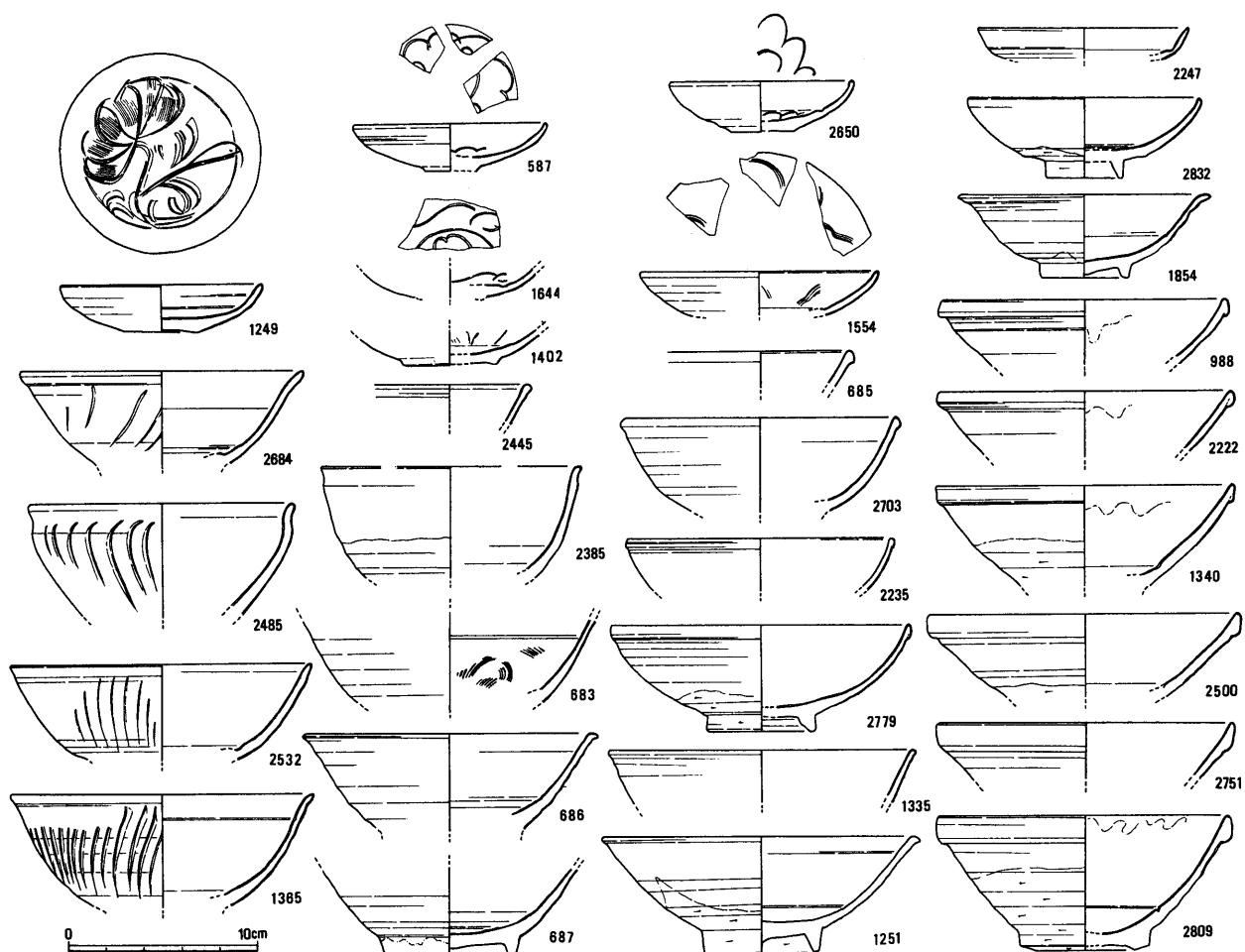


fig. 149 雲出島貫遺跡出土の主要な白磁 (1 : 4) 番号は報告書と一致する

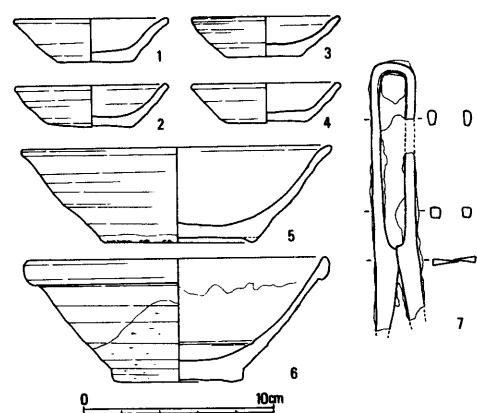


fig. 150 松山遺跡G地区中世墓出土遺物 (1 : 4)  
1~4: 陶器小皿, 5: 陶器椀, 6: 白磁椀, 7: 鉄製鉢

現し、続くF 4期にまで継続すると考えられる。松山遺跡（芸濃町棕本）G地区<sup>(24)</sup>検出の中世墓から出土した一括遺物（fig.150）は、陶器椀・小皿の形態から藤澤編年の5型式古ないしは新に相当し、島貫D 4期古相に相当する。伝世などの影響を考慮すれば、現状ではIV類椀白磁椀の伊勢での出現は12世紀

後半代と考えられる。

なお、木棺墓S X329に見られる白磁椀（博多VI類）や小皿（博多平底皿VI 1類）は、平安京では平安京V期古（11世紀末～12世紀初頭頃とされる）<sup>(25)</sup>には見られるので、土器の時期としてはF 2期新相頃と考えられる。

F 4期の状況は明確ではなく、博多IV類の椀が継続して見られるであろうと考えられるに止まる。

**青磁** 当遺跡の機能時期が13世紀中葉で途絶することもあるって、青磁の確認例は白磁に比べると非常に少ない。

青磁の出現はF 3期以降と考えられる。龍泉窯系のみ確認でき、同安窯系のものが見られない、という興味深い現象がある。

木棺墓S X329に見られる椀は太宰府分類龍泉窯系I - 3類で、初期龍泉窯系のものといえる。所属層中世に相当するひとつの遺跡で見られる土器組成

期は、土師器・陶器の伴出が皆無なため難しいが、あえて比定すればF3期新相かあるいはF4期古相であろう。

この他には太宰府分類I-4類椀およびI-5b椀も散見できる。後者はF4期に伴うものであろう。

青白磁 口縁部に輪化を施した小形杯がF2期に見られる。また、景德鎮産と考えられる椀がF3期相当のSR337で出土している。青白磁は少量で、動向はつかめない。

## 第2章 土器の生産・流通に関する諸問題

とは、地域内流通と隔地間流通とが複合した結果、現在に生きる我々の目前に現象として立ち現れるものであることは言うまでもない。土器の生産・流通の問題についても、「生産されたから流通する」、あるいは「生産地から同心円的に流通範囲がある」というような単純なものではなく、そこにはいくつかの場面ごとに様々な作用が働いていることは、諸先学によって指摘されている重要な考古学的・地理学的・歴史学的認識である<sup>(26)</sup>。

これを踏まえれば、土器の生産・流通に関しても、いくつかの地域的事情あるいはその他様々な背景を有していると考えられる。ここでは、雲出島貫遺跡の状況を基に、いくつかの土器群について生産と流通の問題を考える。

### 1 伊勢における瓦器の流通

伊勢における中世前期の椀形態は、少量の黒色土器・瓦器および土師質土器のものがあるが、その大勢は陶器椀（山茶椀）で構成されている。したがって、ここで検討する瓦器についても、伊勢では概ね客体的な存在である。

だが、この「客体的」と呼べる状況とは、あくまでも組成、すなわち全体に占める割合の状況から見たものである。ここでは出土点数という視座が隠蔽される。例示すれば、全体量10点のうちの1点と、10万点のうちの1万点とが同一視される。両者は組成上は同じであるにもかかわらず、流通量としては明らかな異なりがある。この1点と1万点との間に、相対的に変動する流通にかかる多様な要素が覆い隠されているのではないだろうか。つまり、土器に対し「流通」の問題を考える際には、土器組成す

なわち相対量とともに、絶対量の検討を行う必要があると考える。

まず相対量の問題である。fig.151には、雲出島貫遺跡も含めた近隣遺跡の瓦器椀と陶器椀の比率を示した。これを見ると、陶器椀は伊勢海岸部ほど組成的に優位で、瓦器は伊勢山間部ほど組成的に優位であることが明確にわかる。雲出島貫遺跡の場合、組成に占める瓦器の割合は2%弱である。

これを絶対量で見るとどうか。雲出島貫遺跡では、瓦器の底部残存率は131/12程度であり、陶器椀底部が8,915/12であることと比較すればその差は歴然である。しかし、底部残存率から復元される瓦器椀の個体数はわずか10点ほどでしかないが、実測点数としては46個体分を抽出している。組成では少量と見なすほか無い状態であったが、実測点数の数は決して少ないと評価することはできない。極論ではあるが、瓦器の図を46個体掲載できない伊賀地域（瓦器の中心地域である）の遺跡も間違いなく存在する。

土器の流通に関する問題については、出土量そのものを考慮することによって別の視点を提示すること

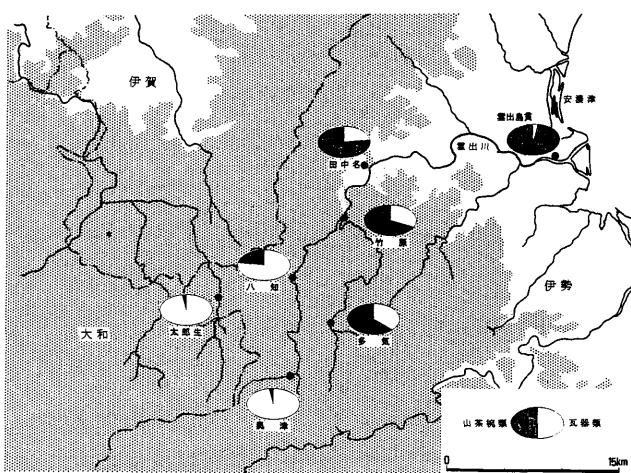


fig. 151 雲出川流域における瓦器と山茶椀の組成

とも可能である。雲出島貫遺跡について言えば、もとより陶器椀優勢の状況下にあるとはいえるが、瓦器を恒常に搬入可能な背景が存在していた、ということができる。

では、瓦器椀はどのような経緯で伊勢へと運ばれたのであろうか。その方法については、大きく2通りの可能性が考えられる。ひとつは、大和・伊賀方面へと何らかの所用で赴いた者が帰路に持ち帰った、すなわち商人的媒介を介在しない入手手段である。もうひとつは商人的媒介を経た、商業的な入手手段である。前者については、伊勢山間部において瓦器椀が組成的に安定している状況下にあることから除外することができる。

後者については、その販売方法から大きく2つに分けられる。ひとつは、伊賀・大和方面の瓦器椀生産地から販売者が伊勢へと直接赴き、里売を行う場合。出職の可能性も含めてもよい。桜井英治氏によると、17世紀頃の商人がかなり遠方にまで出向いている状況を分析しており、瓦器椀の里売を想定することも不可能ではない。この場合、生産者と販売者が同一なのかどうかは考古学的には判断できない。しかし、同じく桜井氏が検討した奈良大乗院の塩座では、本座から問屋に卸された品は、①直接小売りされるもの、②市庭商人に卸されるもの、その他に、③「シタミノ座」と呼ばれる振り売り商人組織へ卸されるもの、がある<sup>(27)</sup>。15世紀中葉の事例とはいえ、組織的に振り売り商人が存在している事実は重要である。伊勢における瓦器椀のような、地域外へと搬出される商品の存在を前提とすれば、このような組織ではないにしてもそれと類似した媒介者を中世前期にまで遡らせて考えることも不可能ではない。

もうひとつは、伊勢側に瓦器取り扱い商人が介在している場合。瓦器を扱う市庭の存在を想定することになる。この場合の市庭商人は、やはり伊賀方面から赴いた人物の関与が考えられるが、立庭権そのものが瓦器側すなわち伊賀方面の人物にあったと想定するのはやはり無理があり、伊勢側商人によって立庭されたところに参加したと考えるのが妥当であろう。無論、市庭にも定期市のほかに年数回程度の不定期市も存在したであろうから、市庭の数までは特定できない。

上記の状況を踏まえ、伊勢における陶器椀と瓦器の出土状況から想定される、分布状況と組成との関係を作業仮説的に表現してみたのがfig.152-①・②である。筆者は別稿において、このような伊勢における瓦器椀・陶器椀の分布状況の違いを「商圈の裾野」の問題として採り上げた<sup>(28)</sup>が、その「裾野」が形成されるに至る2つのパターンをまず想定できる。

fig.152-①は、伊賀方面から伊勢海岸部に至るに従って漸次瓦器椀の流通量が減少するもの。生産地から市庭を介さずに里売される場合、伊賀方面に近いほど供給量が多く、伊勢海岸部ほど少なくなると見る場合である。この場合、当然ながら瓦器椀流通媒介者が伊勢平野部での里売のための流通権を得ていたことになる。

fig.152-②は、伊勢側の瓦器椀流通量が、ほぼ均一な状況と考えた場合。瓦器椀の販売される市庭が存在していたとすれば、このような状況が発生しよう。しかし、伊勢平野部での瓦器椀の量を考慮すれば、大々的な商品取引の存在を考えることはできず、不定期市を含めて考えることになる。

瓦器椀が伊勢海岸部側にもある程度分布する、という事実からは、以上のような見通しを立てることができる。ここでキーとなるのは伊勢における瓦器椀と陶器椀との関係である。

伊勢における陶器椀については、筆者は別稿で安濃津で集荷された後に各地の市庭相当地へと2次的に集積される、という状況を考察した<sup>(29)</sup>。雲出川上流域における陶器椀の分布が同じ水系内という交通の利便性を持ちながらも八知あるいは多氣（いずれも一志郡美杉村地内）を境に大きく異なっている状況からは、陶器椀の商圈が単純に地形的環境によって制約されるものではないといえる。市庭の地理学的な検討を行っている石原潤氏の業績<sup>(30)</sup>に学べば、八知あるいは多気が、雲出川流域における陶器椀「市庭圏」の最外縁部に相当する可能性は極めて高い。なお、里売の存在を仮定した場合でも、それはほぼ伊勢側に限定され、伊賀にまで赴いての行為は考え難い。

これを踏まえて瓦器の分布を見ると、絶対量としては伊勢平野部にも一定量分布することを評価すれば、伊賀方面の瓦器を扱う媒介による伊勢平野側へ

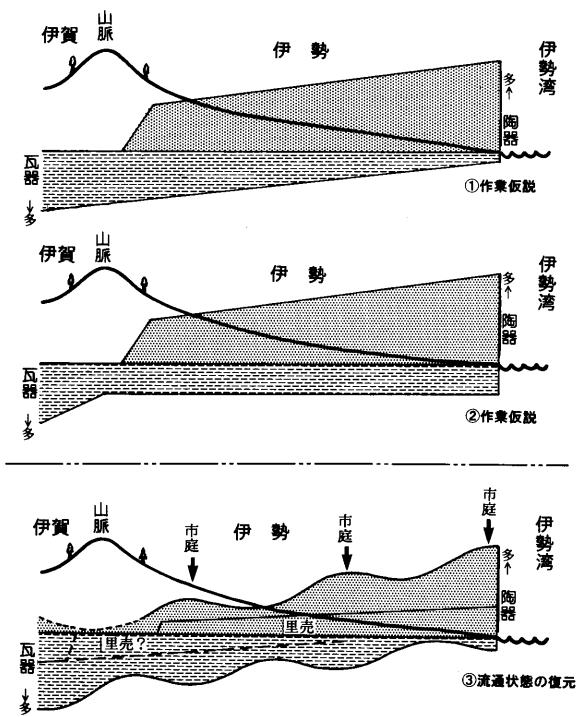


fig. 152 伊勢における土器流通模式図

のある程度恒常的な里壳、あるいは市庭への2次的集積を想定できる。ただし、里壳の可能性があるとすれば、先述の「シタミノ座」のような集団による伊勢での里壳流通権が確保されていたと考えることになるが、そうすると基本的には競合すると考えられる陶器椀とその流通圏のなかで、里壳にかかるコストに見合う需要と利潤その他が瓦器側に確保できる可能性は極めて少ないと見ざるを得ない<sup>(31)</sup>。

したがって、伊勢側における瓦器椀の流通には市庭を介していたものが中心と見るのが最も妥当かと考える。その場合瓦器が捌かれる市庭は、fig.151では太郎生・奥津・八知・多気および山田野あたりが考えられ、雲出川中流の井生・川合や下流の雲出島貫あたりにも存在していた可能性も充分にある<sup>(32)</sup>。

なお、ここで想定した雲出川中流域以東の市庭における瓦器椀の取り扱い量は、陶器椀類との競合地であることを考慮すればあまり多くはないと考えるのが妥当である。それにもかかわらず、伊勢海岸部までそこそこの量が及ぶことを考えると、瓦器の捌かれる主な市庭が、各地域単位に細かく見られる小規模市庭を中心としていた可能性もあろうか。

このような市庭の状況を想定して、伊賀から伊勢側にかけての瓦器椀と陶器椀の流通相関関係を模式

的に表してみたのがfig.152-③である。市庭での瓦器椀販売力は海寄りほど弱くなるとはいえ、各市庭近隣かどうかによって入手の難易も一応考慮してみた。これが現象面として現れたのがfig.151に示した分布状況と考える。

伊勢地内に存在する中世遺跡は、当然、その全体が調査されたわけではない。したがって、伊勢における瓦器の出土事例は、今後も間違いなく増加する。この状況を認識すれば、伊勢地内での瓦器の商品流通は、陶器椀優勢地帯という条件下においてもなお、動かし難い。その背景をより正確に把握するために、各遺跡単位での土器組成を見る作業とともに、発掘調査面積上の限定性を踏まえながら絶対量を見出していく作業が必要である。このような極めて地道な作業を重ねることによって、文献史料などでは知り得ない物流の問題にはじめてくい込んでいくことが可能となろう。

## 2 東海系陶器類の流通

尾張・三河を主要な産地とする陶器椀（山茶椀）の流通について、筆者は生産者とは完全に分離した商人の存在を想定している<sup>(33)</sup>。彼等は、伊勢では安濃津などの大規模港町（大集荷地）を根拠とし、未調整のまま運び込まれた陶器椀を商品として流通させるためにさらに選別し、次の市庭（二次的集積地）や周辺集落へと供給していると考えた。

雲出島貫遺跡は、潟湖“藤潟”の南岸であるとともに、雲出川河口にもほど近い位置に立地する。そのため、陶器椀類の集荷地あるいは二次的集積地の可能性を考えた。

雲出島貫遺跡B 7区出土の陶器椀は、底部の残存度（口縁部計測法を底部に応用した方法）で8,915/12である。単純計算でも $8,915 \div 12 = 743$ （個体）となる。B 5・6区出土のものも含めたり、全てが完形品とは限らないことをも考慮すれば、総点数としては1,000点を越えていると見られる。

しかしその中で、椀内面に研磨痕の見られない、未使用状態を示すものと認識できたのは10個体に過ぎず、全体の割合では1%程度ということになろう。同様な観点で未使用と判断できたものは、安濃津遺

跡群（大集荷地）で96%、里前遺跡と川北城跡（いずれも二次的集積地）ではそれぞれ56%・37%であり<sup>(34)</sup>、雲出島貫遺跡の状況とは明らかに異なっている。組成上の比率、および未使用製品の絶対量、の2点から、雲出島貫遺跡は陶器椀の集荷地・集積地としては把握できず、消費地であることを明白に物語っている。すなわち、陶器類の集荷という行為は、海浜部であればどこでも行われるものではなく、その機能は極めて限定された地でなされるものである、という、いわば当たり前のことが今回明確に確認できたといえる。

### 3 伊勢の土師質土器が意味するもの

前章において、伊勢ではこれまで「ロクロ土師器」と呼称されていた土器群を「土師質土器」とした。当該土器群の出土は、伊勢でも頻繁に確認されるものの、具体的な検討はほとんどされていない。ここでは、伊勢における当該土器の位置づけを行っておく。

#### a 研究の状況

当該土器群の全国的な研究状況については森隆氏が明快にまとめている<sup>(35)</sup>。これを参考すると、当該土器群に対する把握の状況が全国的にも様々であり、その結果、付与される名称についても、各地各様である。

この原因のひとつは、当該土器群が手法的には全国的に概ね共通するものであるにもかかわらず、その発生段階の状況とその土器群とそれ以外の土器との相関関係が各地域で異なるためではないかと考える。つまり、土器組成上土師器に比重がかかる地域、陶器と土師器に比重がかかる地域、などのように、各地域単位での土器相は一様でなく、したがってそれぞれの地域における、ここでいう土師質土器の位置づけも異なってくると考える<sup>(36)</sup>。

地域単位での当該土器群の位置づけこそが最優先される<sup>(37)</sup>ものであるとするならば、伊勢においては土師器と陶器との関係のなかで位置づけていくことがまず求められるであろう。

#### b 伊勢での位置づけ

関東地方におけるこの土器群について検討された

福田健司氏は、「土師器でもなく須恵器でもない中間的な土器」とし、「須恵系土師質土器」と呼称・認識している<sup>(38)</sup>。この福田氏のことばのうち、「須恵器」を「陶器」と呼び代えれば伊勢における当該土器群を示す最も適切なものとなる。しかし、関東地方の当該土器群に対して福田氏が付けられた「須恵系」の用語をそのまま伊勢における当該土器群に付設することはできない。伊勢における当該土器群は、成形の方法からは明らかに陶器の系統下と見なせるが、形態的には陶器以上に土師器の影響を極めて色濃く映し出している部分も見られるためである。

結論を先に言えば、伊勢におけるこの土器群は、土師器・陶器の双方を前提とした存在であり、両者のいずれかが欠落した状態では決して成立し得ないものと認識する。その意味では、福田氏の指摘とはやや異なった意味での「中間的」な土器群と考える。小稿で「ロクロ土師器」という、用語上その帰属が土師器へと必然的に帰結する名称を回避したのはそのためである。

東海地域におけるこの土器群の土師器的要素については、尾野善裕氏の指摘がある<sup>(39)</sup>。尾野氏は尾張猿投窯出土の当該土器の中に京都系土師器小皿（前章でいう小皿c）との類似性を見出すという、非常に重要な分析を行っている。

尾野氏は、「陶器生産地域におけるロクロ成形土師器皿」という限定を行っているが、尾野氏の認識は伊勢の状況にまで敷衍することはできないであろうか。伊勢は、これまでにも触れてきたように、陶器椀・瓦器椀などの椀類は基本的に外部から供給を受ける地であり、その意味でのベースは尾張の状況と

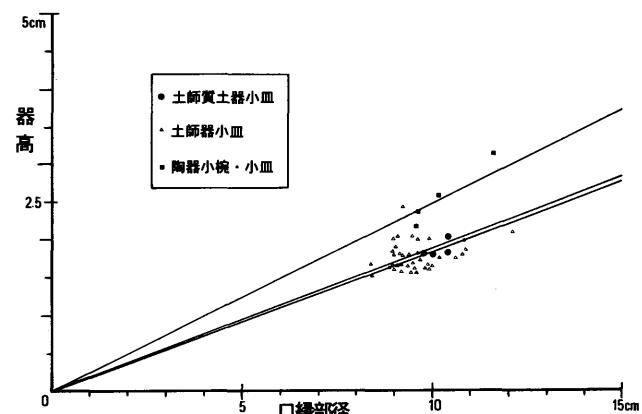


fig. 153 雲出島貫遺跡 S K 282出土小皿類法量分布  
※陶器小椀については高台部分を含まない

同様なものを想定できると考える。

fig.153は雲出島貫遺跡 S K282から出土した椀・皿・小皿という主要供膳形態土器について、口径と器高の関係を比較したものである。これを見ても明確なように、土師質土器は、その法量的見地からは陶器類以上に土師器類との近似性が窺える。すなわち、土師質土器に見られる皿・小皿とは、手法的には陶器類に近似しているものの、そのまま焼成すれば陶器になる、というものではなく、その形態的目標は尾野氏の言うように土師器に置かれていたと考えられる<sup>(40)</sup>。このように、尾野氏が尾張で分析されたものと同様な評価を伊勢の土師質土器についても行い得ると考える。

また、雲出島貫遺跡出土の土師質土器小皿には、少量とはいっても油煙痕の確認できるものがある。このような使用痕は灯明皿としての用途を示すもので、土師器にこそ認められるものの、陶器小椀・小皿の類では見られない。このことも、当時この土器を実際に使用していた人々の認識としては、土師質土器は土師器に近いものであったといえよう。

このようなことから、伊勢における当該土器群については、暫定的なものとなる可能性があるものの、両属性的な名称を与えることを優先して「土師質土器」と呼称することとした。勿論、筆者自身もこの名称にこだわるつもりは無く、作業過程における暫定的なものであることを強調しておく。

### c 成立と終焉

さて、土師質土器の成立は、斎宮跡ではその区分でいう平安後Ⅰ期（10世紀後半頃）<sup>(41)</sup>とされている。雲出島貫遺跡においては、当該時期相当、あるいはやや新しい時期と考えられるものに、SK205がある。そして終焉時期は、雲出島貫遺跡では13世紀に入るか入らないかという時期である。この終焉時期は、概ね伊勢における他の遺跡でもその傾向が指摘できる<sup>(42)</sup>。

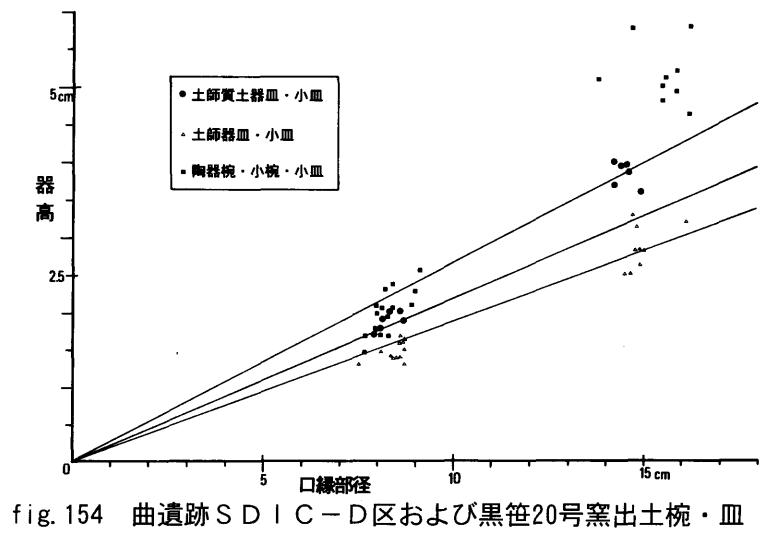
この、長く見積もって250年程度の存続期間のなかでの当該土器は、伊勢においてはその後何らの伝統も残さないまま忽然と消滅するように見える。事実、13世紀以降も土師質土器が継続して生産・流通している現象は全く

認識できない。しかし、何らの影響も残さないまま消滅したと断定することもできない。

fig.154は、曲遺跡（松阪市曲町）SD1-C・D区上層出土<sup>(43)</sup>の土師器・陶器・土師質土器の椀皿形態土器について、口径と器高の関係を比較したものである。参考として、これよりも新しい、藤澤編年で6型式に相当する黒笛20号窯出土の小皿<sup>(44)</sup>も含めている。藤澤編年の4型式までは椀一小椀のセット関係が見られたものが、5型式を緩衝期とし、6型式には小椀が小皿へと移行していることはよく知られたことであるが、6型式の小皿は、5型式まで的小椀・小皿との形態的連続性が見えにくいものである。そして6型式以降の陶器小皿が、土師器小皿の法量と極めて近似していることがfig.154からは窺える。

小椀→小皿という変化は、東海系陶器椀類のみならず、瓦器においても見られる。大きく言えば、<椀一小椀>から<椀一小皿>の関係への移行は、素材や工人差を越えた動向として見ることができる。瓦器小皿は、土師器の手法と比較的近似し、なおかつ土師器小皿とともにまとまって廃棄されているような状況は、近隣の伊賀では小倉遺跡<sup>(45)</sup>（阿山町馬場）で顕著に見られる。

瓦器における小椀の消滅は、山田編年でもⅡ段階内においてである。瓦器における小椀の動向と同一視することはできないものの、陶器において小椀から小皿へと移行する段階は藤澤編年5型式である。そして、これらの時期が土師質土器の終焉時期と概



ね一致することは注目する必要がある。土師質土器が、陶器の成形手法を用いながらも土師器の器形および用途を目的としていた、という小稿の観点からすれば、土師質土器の指向が陶器小皿の成立に何らかの影響を与える可能性があるのでなかろうか。すなわち、土師器的機能の追求という土師質土器の指向は、陶器小碗の機能喪失が進むなかで陶器小皿が受容することとなり、それとの相関のなかで土師質土器が終焉する可能性があると考える。

ただし、伊勢でこの後に陶器小皿の需要がこれまで以上に増加しているわけではない。土師質土器の終焉後に最も増加するのは他ならぬ土師器である。結局のところ土師質土器に見られた指向としての土師器模倣は、本来の土師器以上のものとはなり得なかったといえようが、この点は今後の課題である。

中世成立期に象徴的ともいえる土師質土器は、伊勢においてはいわば古代的土器生産体制、あるいは古代的流通方法が搖籃したその間隙を縫って出現した<sup>(46)</sup>。土師器を指向したこの土器群は、供膳形態土器のなかで一定程度の組成を占めるまでには至ったものの、結果的には土師器そのものに駆逐された、と考えられる。その最も大きな作用は南伊勢系土師器という南伊勢地域における独自性を發揮して成立了土師器生産供給体制の確立であろうと推測するが、一方では陶器生産地帯での小皿生産に幾ばくかの影響を与えたものと考えられる。

#### 4 伊勢における京都系土師器の位相

最後に、雲出島貫遺跡で多量に確認された京都系土師器についてみておく。

##### a 中伊勢地域における京都系土師器受容の背景

中世京都を中心に展開する土師器群が、列島各地に影響を与えてることについては、既に多くの論考があり、その認識も深化している。伊勢においても、雲出川流域部を中心としてこの土器群が存在している。

雲出島貫遺跡の状況は、京都系土師器の影響が色濃く映し出されたものとして認識できる。いや、細部にわたる調整手法上の異なりをこの際度外視すれば、当遺跡の土師器類は、京都系そのものによって

主体が構成されていると見るべきである。

では、そもそも「京都系」とは一体何であろうか。「京都系」と言う以上、自ずと「<非>京都系」が指定されているとともに、当該時期における「京都」という地域の独自な存在をも想定（規定）していることになる。その意味で「京都系土師器」とは、京都内部から内在的に規定されるべき存在であるとともに、その外部からも同様に規定される概念であるといえる。

中伊勢地域における「京都系」とは、中伊勢地域で系譜を追うことの出来ないものが出現し、それがこれまでに「京都系」と呼ばれていた一群、ということになる。小稿でいう土師器小皿 b 類（ての字小皿）などはその典型である。また一方で、当該地域の「非京都系」とは、南伊勢方面の土器群と、前述の土師質土器の一群が相当する。

雲出島貫遺跡における「京都系」のあり方を、京都外部である中勢地域の状況として規定していくならば、どのような背景で成立したのか、あるいは成立し得るのかを追求する必要がある。

ひとつの独自性として京都系土師器を見るならば、それは概略的には京都方面の土器文化が中伊勢地域に強い影響を及ぼした、ということになる。土器という限定された素材の中にも何らかの歴史的背景が含まれているという筆者の基本的立場から言えば、そのような影響力の主体としての京都方面を中心とした当該時期の政治経済的状況、すなわち莊園公領制の基礎が固められる時期に相当することと何らかの関係があるものと考える。

雲出島貫遺跡に見られる京都系土師器は、その出土量が膨大であり、比較的短期間で集中的に消費（浪費！）されている状況からしても、「在地社会」を形成する階層的に下部の行為とは見られず、京都と密接な関係を持つかなり上層部の関与があると想定する。とするならば、京都系土師器に関する在地への情報の伝達者としてもそのような人物が関わっていたと考えられる。土器生産者の関与は、その情報が在地に伝達された後に発生するものと認識する。

この一方、当該時期の南伊勢地域では、地域色が次第に強まっていく土器群が生産されていることは、斎宮跡およびその近隣諸遺跡の状況から明らかであ

る<sup>(47)</sup>。しかし、古代末から中世のいわゆる「都鄙間交通」は、いくら形骸化しつつあるとはいえ、斎宮—京都ラインは重視されている<sup>(48)</sup>。この前提に立てば、斎宮周辺、すなわち南伊勢地域の土器相に見られる古代末から中世にかけての地域色顕在化の状況には、京都との密接なつながりがありながらも、京都系を受け入れる必要が無かった、あるいは受け入れが不可能であったという背景が想定できる。したがってその背後には、南伊勢地域における土器工人あるいはその流通媒介者の極めて強い意志を想定することができる。

南伊勢地域の土器が雲出島貫遺跡周辺地域へと搬出されていることは、土師器甕類の存在や、少ないながらも存在する土師器皿類によって確認できる。土師器の煮沸用具については、少量の清郷形甕があるものの、南伊勢地域の甕で構成されているといつてよい。南伊勢系土師器が成立した13世紀初頭以降は、雲出島貫遺跡をはじめ中伊勢地域の土器組成に占める南伊勢系の比率は増加している。

そもそも雲出島貫遺跡近隣は、神宮領嶋抜御厨が存在していた地である。当御厨が現在確認できる最古の御厨であり<sup>(49)</sup>、そしてそのような御厨が神宮直轄領である可能性が高いという稻本紀昭氏の見解<sup>(50)</sup>を踏まえれば、そこに南伊勢地域の土器群が数多く確認されるという事態も当然想定できる。このように雲出島貫遺跡近隣は、南伊勢地域の土器群と無縁な状況にあったわけではなく、場合によっては京都系でなく南伊勢地域の土師器皿類を大々的に搬入することは可能であった地なのである。

以上を踏まえることによって、京都系土師器皿類の中伊勢地域という「在地」への影響の状況を評価できる。すなわち、畿内中心地域以外への京都系土師器の受け入れとは、京都との密接な関係を背景としながらもそれだけではなく、土器工人層の独自性の強弱、および情報伝達者としての在地上層部の意識的な関与の度合いによって決定されるものと推測する。雲出島貫遺跡、あるいはこの遺跡を含む雲出川下流域における京都系土師器類は、京都方面からの影響が伝わったという程度の消極的なものではなく、それを積極的に受容しようとする地域的背景を有していたことを示していると推測する。

さて、雲出島貫遺跡において典型的に見られた京都系土師器の受容は、13世紀前半頃を境に大きく変化する。13世紀前半以降の中伊勢地域の土師器皿類（皿a4・a5）は、巨視的に見れば京都系土師器の系統下と見てよいかも知れないが、その形態的イメージはそれ以前の状況とはかなり異なっており、「在地的」な形態となっている。この段階以降は、京都との断絶を重視すべき状況といえる。これは、ほぼ同じ時期の瓦器椀に、それまでの大和型から伊賀型への分化・成立を見出した山田猛氏の視点とも一致する<sup>(51)</sup>状況といえる。

この問題と、先述した土師質土器の終焉、および南伊勢系土師器の成立、という問題は、別々の土器群とはいえ、ある意味で密接に関係していると見られる。京都の直接的影響を見出せなくなった13世紀以降、中伊勢地域における南伊勢系土師器の出土は皿・鍋類を中心に急激に増加する一方、土師質土器はほぼ終焉している。南伊勢系土師器の展開を起点に据えるとすれば、それが中伊勢地域に大きく進出したことによって京都系土師器に打撃を与えるとともに、土師質土器の終焉を誘引したことともできる。それとともに、京都系土師器のイメージ伝播の媒介者が中伊勢地域から基本的に撤退したことがその原因のひとつであろう。その意味で、荘園公領制の基礎を築いた院政期、あるいはそれと強く結びつき、雲出島貫遺跡の形成に大きな役割を果たしたと想定される平氏の存在<sup>(52)</sup>は、中伊勢地域の土器相にも大きな影響を与えていていると考えられるのである。

### b 土師器小皿b類（ての字小皿）の問題

雲出島貫遺跡で出土した土器類のなかで、量的に最も目立つのが小稿でいう土師器小皿b類、いわゆる「ての字小皿」である。口縁部計測法で、B7区のみで18,435/12であり、これを単純に個体数換算しても1,536個体となる。消耗度をも考慮すれば、悠に2,000点は越えているであろう。

この出土量からも、雲出島貫遺跡の特殊性を言うことができるかも知れない。しかし、この土器の伊勢における組成の状況が今一つよく分からぬ。伊勢における当該土器の存在についていち早く注目された新田洋氏の集約<sup>(53)</sup>によても、近隣遺跡では数遺跡で極微量の出土が知られるのみである。新田氏

の集約以後に付け加えられるものも、雲出島貫遺跡を除けば小野遺跡（松阪市小野町）<sup>(54)</sup>、松本権現前遺跡（三雲町小野江）<sup>(55)</sup>、位田遺跡（津市北河路町）<sup>(56)</sup>があるに過ぎず、いずれも1点あるいは数点程度の出土である。

土師器皿b類が見られる時期の遺跡調査事例が少ないとその一因を求めるこどもできるが、そ

れにしても出土例が少ないことは指摘できそうである。現状での感覚的な指摘ではあるが、当該土器の存在そのものが雲出島貫遺跡のような中心的な遺跡においてのみ発生するものであり、それ以外の点的な出土例を示す遺跡は、雲出島貫遺跡のような遺跡からの二次的な波及と見ることもできるのではないだろうか。

### おわりに

以上、雲出島貫遺跡出土の土器を中心として、中世成立期の土器に見られる諸問題を検討してきた。

雲出島貫遺跡の所在する中伊勢地域は、11世紀後半頃における京都系土師器を積極的に受容し、12世紀代まではその状態を保持し続けた。

土師器皿類の需要が、地域住民ではなく在地下層部とすれば、その背景には神宮以外の権力の関与が想定される。雲出島貫遺跡を中心とした地域権力的背景は、院政権およびそれと強く結びついた平氏と考えられる。

さて、当該時期は荘園公領制が基礎を固める段階である。直接的には困難であるが、考古学的な事例についてもそのような観点からの検討が必要である。田村憲美氏はこの時期を、「地域」社会出現の時期として重視しており、制度的に導入されていた歴史的<所与>としての国郡制が、この段階においてはそれまでに形成されていた在地社会（田村氏はこれを「原」地域、とする）のなかで、歴史的<所産>として荘園公領制が地域の側から創出されていく、という興味深い指摘をしている<sup>(57)</sup>。

大枠としての荘園公領制の創設には権力側からの働きかけも不可欠であるが、このような在地的な視

点が地域史を見る上で重要なことは確かである。このような、在地的な観点を踏まえて雲出島貫遺跡の土器相を改めて見てみると、在地色のやや薄い京都系土師器の一群がある一方、土師質土器にこの地域の独自性を見出すことが可能である。ある意味では、中伊勢地域における京都系土師器とは歴史的<所与>なのであり、土師質土器とは歴史的<所産>であるということもできよう。このような、2つの様相が入り混じる状況にこそ、中世成立期の中伊勢における土器群が持つ、まさに両属的な状況を見ることもできるのである。

中伊勢地域、とくに雲出川流域に見られる近畿中枢部との密接なつながりは、7・8世紀代における精緻な暗文土師器の存在<sup>(58)</sup>によって、時代を越えた傾向ということもできる。そのような傾向がほぼ完全に払拭される時期として、13世紀代以降が改めて評価できる可能性があろう。

成稿にあたっては、橋本久和氏・吉村正親氏・森島康雄氏・佐藤亜聖氏らをはじめとする中世土器研究会諸氏や山田猛氏から有益なご教示を頂いた。記して感謝致します。

### <註>

(1) 宇野隆夫「食器計量の意義と方法」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992年）なお、計測データについては、当書第IV章を参照のこと。

(2) ここで言う一括資料については、一瀬和夫氏のいう「製作時であり、使用中であれ、廃棄であれ、完形土器が比較的に安定した同一土層中に群在して出土したもの」に従っている（同氏「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『大阪文化財論

集』（助大阪文化財センター 1989年 p 199）がS Z291の例もあるため、その中でもより狭い範囲に群在するものに限定する。

(3) 「土師質土器」については、後述している。』

(4) 伊野近富a「かわらけ考」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集 1987年）・同氏b「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」（『中近世土器の基礎研究』V 1989年）・同氏c「古代の中世洛外産土師器皿の生産と流通」（『中近世

土器の基礎 研究』IX 1993年)

(5) 拙稿『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)

(6) 拙稿「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol.1 三重歴史文化研究会 1990年)

(7) 斎宮跡S E 7600などに良好なものがある。野原宏司ほか『史跡斎宮跡』平成8年度発掘調査概報(斎宮歴史博物館 1997年)

(8) 田中琢「古代・中世窯業の地域的特色(4)畿内」(『日本の考古学』IV 河出書房 1967年)

(9) 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』古代の土器研究会 1994年)

(10) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群1」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 1982年)、同氏「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)

(11) 斎藤孝正「中世猿投窯の研究～編年に関する一考察～」(『名古屋大学文学部研究論集』C I 史学34 1988年)

(12) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983年) なお文中では、川越氏の「□段階○型式」を「□—○型式」と略記していく。

(13) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究』II 1986年) なお文中では、山田氏の「第□段階○型式」を「□—○型式」と略記していく。

(14) 前掲註(4)伊野氏b文献

(15) 斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」(『史跡斎宮跡』1984 三重県教育委員会 1985年)

(16) 小皿b3のような、口縁端部が内側へ折り返されるような形態や全体の断面形が弧状を呈する点などが、京都との相違点として見られる、という森島康雄氏のご教示を得た。

(17) 中村信裕「宮間戸遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年) および拙稿「中世前期における伊勢の土師器皿について」(『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993年)

(18) 吉村利男ほか「平生遺跡発掘調査報告」平生遺跡発掘調査団 1976年) および前掲註(15)拙稿

(19) 森川常厚「結語」(『鴻ノ木遺跡』上巻編 三重県埋蔵文化財センター 1998年)

(20) 斎宮跡調査事務所「史跡斎宮跡」1985(三重県教育委員会 1986年)

(21) 大川勝宏「斎宮の黒色土器～供膳形態を中心～」(『斎宮歴史博物館研究紀要』2 1993年)

(22) 森本朝子「博多出土貿易陶磁分類表」(『博多－高速鉄道関係調査(1)－』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 福岡市教育委員会 1984年) および同氏「博多出土の貿易陶磁－その分類試案(1)－」(『博多研究会誌』 第5号

博多研究会 1997年)

(23) 太宰府分類については、横田賢次郎・森田勉の両氏による分類(「太宰府出土の輸入陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年)をさらにまとめられた山本信夫氏の分類(同氏「土器の分類」(『太宰府条坊跡』II 太宰府市教育委員会 1983年)を用いる。

(24) 1987年度三重県教育委員会調査。資料として、三重県教育委員会『芸濃南部発掘調査ニュース』No.1～8(1987～1988年、リーフレット)がある。

(25) 古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』(1994年)

(26) 生産史・流通史については、考古学的、あるいは歴史学的に極めて長い研究史がある。それを細かに検討するのが本来ではあるが、ここでは近年の研究のなかで最も整理されていると考える藤田裕嗣氏の論考を挙げておく。同氏「流通システムから見た中世農村における市場の機能」(『人文地理』第38巻第4号 1986年)

(27) 桜井英治「市の伝統と経済—14～17世紀—」(『中世を考える 都市の中世』吉川弘文館 1992年) および同氏「市と都市」(『中世都市研究』3 新人物往来社 1996年)

(28) 拙稿「安濃津の成立とその中世的展開」(『日本史研究』448 1999年)

(29) 拙稿「安濃津に関する基礎検討」(『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1997年)

(30) 石原潤「定期市の研究～機能と構造～」(名古屋大学出版会 1987年) p 24～28

(31) 前掲石原氏著書 p 44・45

(32) 統計処理していないが、一志町井生地内の調査でも瓦器椀の出土はかなり見られる。それを基に雲出島貴遺跡での出土量も加美すれば、川合地内(一志町)あるいはさらに下流の久居市南東部でも市庭の存在を考えることも可能である。ただし、この点はあくまでも現状における見通しに過ぎないので、今後肉付けを行っていただきたい。なお、一志町内の状況については、伊勢野久好氏にご教示を頂いた。

(33) 前掲拙稿註(28)(29)文献

(34) 底部残存度1/4以上の個体に関して集約を行った結果である。里前遺跡では未使用が240点、使用痕有りが187点である。川北城跡では、未使用371点、使用痕有りが633点である。この概略は拙稿註(28)文献に記載した。

(35) 森隆「回転台土師器の研究史素描」(『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会 1994年)

(36) その結果、西日本、とくに近畿地方においては「回転台土師器」という認識が生まれたものと認識する。前掲註(32)森氏論文および同氏「畿内に於ける古代後半の土器様相」(『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』中世土器研究会・東国土器研究会シンポジウム実行委員会 1990年)、橋本久和「畿内周辺の回転台土師器」(『考古学研究』38-1 1991年)

(37) 前掲註(52)森氏論文 p 9

(38) 福田健司「須恵系土師質土器について」(『日野市落川遺跡調査概報』V

日野市落川遺跡調査会 1987年)

(39) 尾野善裕「生焼け山茶碗と土師器皿～山茶碗生産地域におけるロクロ成形

土師器皿の生産～」(『考古学フォーラム』4 1994年)

(40) この点については、東北地方を中心に検討された松本健速氏も、「ロクロか

わらけには手づくねかわらけの代用品として製作されたと考えられるような外観  
の製品が含まれる」という指摘をされている。同氏「12世紀代東北地方における  
かわらけ存在の意味」(『中近世土器の基礎研究』X III 日本中世土器研究会

1998年 p34) (41) 前掲註 (15) 文獻

(42) 前掲註 (15) 文獻など。

(43) 前川嘉宏「曲遺跡」(『県道丹生寺一志線及び県道合ヶ野松阪線道路改良工

事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1989年)

(44) 前掲註 (11) 斎藤氏文献のp25掲載の図を参照した。

(45) 川戸達也・東山則幸「小倉遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵  
文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991年)

(46) 当該土器群成立に至る土器工人の動向としては、南伊勢地域を中心として  
分布する椀（小穂でいう椀b）の成立が極めて興味深い。椀bの手法的特徴は灰  
釉陶器あるいは陶器椀（山茶椀）に共通する。そのため、土器そのものの技術で  
は陶器生産工人の系列下にありながらも、何らかの要因で“土師質”を選択した、  
というような背景が想起される。このことは、伊勢における土師質土器の生産開  
始問題を考えるうえで、極めて重要な意味を持つと考えられる。

(47) 前掲註 (15) 文獻参照。

(48) 天野秀昭『斎王群行と伊勢への旅』特別展図録（斎宮歴史博物館 1998年)

(49) 『大神宮諸雜事記』延長6 (928) 年4月13日条 (『群書類從』第1輯)

(50) 稲本紀昭『建久三年「伊勢太神宮領注文」と「神鳳鈔」』(『史林』68-I  
1985年) および同氏「伊勢国」(『講座日本歴史』6 吉川弘文館 1993年)

(51) 前掲註 (13) 山田氏論文

(52) 雲出島遺跡と平氏の関係については、拙稿「鶴抜をめぐる諸問題」(当報  
告書第VI章) を参照されたい。なお、この問題については、別稿で改めて検討を  
予定している。

(53) 新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相―特に土師器に  
ついて素描一」(『マージナル』No.9 愛知考古学談話会 1988年)

(54) 吉村利男「小野遺跡」(『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘  
調査報告』三重県考古資料普及会 1976年)

(55) 拙稿「三雲町の考古資料」(『三雲町史』第2巻資料編1 1999年)、村田  
匡『松本権現前遺跡発掘調査報告』(三雲町教育委員会 1999年)

(56) 米山浩之『位田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1999年)

(57) 田村憲美「中世前期の在地社会と「地域社会論」」(『歴史学研究』674  
1995年)

(58) 雲出川流域部における古代の精緻な暗文土師器は、雲出島遺跡のほか、  
堀田遺跡(中川明ほか『堀田遺跡第3次発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター

1996年)、平生遺跡(前掲註 (16) 吉村氏ほか文献)など、各所に見られる。